

一般県道長浦上総線(木更津市下郡) 埋蔵文化財調査報告書

－木更津市門田遺跡・和田内遺跡－

平成12年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

一般県道長浦上総線(木更津市下郡) 埋 藏 文 化 財 調 査 報 告 書

—木更津市門田遺跡・和田内遺跡—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第378集として、千葉県土木部の一般県道長浦上総線（木更津市下郡）建設事業に伴って実施した木更津市門田遺跡・和田内遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代および古代の水路跡や小櫃川の旧河道、近世の溝跡が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。刊行に当たりこの報告書が学術資料や郷土の歴史学習のための資料などとして広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力を賜った地元の方々を始めとする関係の皆様や関係諸機関、また、発掘から整理まで御労苦をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成12年3月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による一般県道長浦上総線（木更津市下郡）建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県木更津市下郡字門田590-2ほかに所在する門田遺跡（遺跡コード206-015）、及び木更津市下郡字和田内389-2ほかに所在する和田内遺跡（同206-017）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の組織、担当者及び期間は本文中に記載した。
- 5 本書の編集及び執筆は技師 城田義友が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、木更津市教育委員会のほか、多くの方々の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「上総横田」(N1-54-19-16-4[千葉16号-4])
1/25,000地形図「久留里」(N1-54-20-13-3[大多喜13号-3])
 - 第2図 木更津市役所発行 1/2,500地形図 (K-L E 44-2)
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方針は、全て座標北である。

本文目次

Iはじめに	
1 調査に至る経緯	1
2 遺跡の位置と環境	
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	3
II 門田遺跡	
1 調査の経過と概要	5
2 遺構	
(1) 溝状遺構	5
(2) 旧河道	9
3 遺物	11
III 和田内遺跡	
1 調査の経過と概要	13
2 遺構	
(1) ピット群	13
報告書抄録	卷末

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	4
------------	---

挿図・図版目次

第1図 門田遺跡・和田内遺跡と周辺の遺跡	第9図 和田内遺跡確認トレンチ配置図
第2図 門田遺跡・和田内遺跡と周辺の地形	第10図 和田内遺跡1T検出ピット群
第3図 門田遺跡確認トレンチ配置図	
第4図 門田遺跡確認トレンチ土層断面図	図版1 遺跡周辺航空写真
第5図 門田遺跡4T検出旧河道	図版2 門田遺跡遠景・門田遺跡調査前全景
第6図 門田遺跡6T検出溝状遺構	図版3 門田遺跡確認トレンチ
第7図 門田遺跡7T検出旧河道	図版4 門田遺跡出土遺物・和田内遺跡確認トレ
第8図 門田遺跡出土遺物	ンチ

I はじめに

1 調査に至る経緯

長浦上総線は袖ヶ浦市長浦から木更津市東部を経て、君津市上総地域に至る一般県道である。近年の交通量増加に対応するため、木更津市下郡地区における拡幅工事を計画した千葉県土木部から、千葉県教育委員会に対して、建設予定地内における埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会があった。協議した結果事業計画の変更が困難であることから、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが調査を実施することとなった。

各年度の調査期間と業務内容、組織と担当者は以下のとおりである。

平成9年度

発掘調査 門田遺跡

期間 平成9年10月1日～平成9年10月31日

組織 調査部長 西山太郎、調査事務所長 高田 博

担当者 技師 城田義友

平成10年度

整理作業 門田遺跡（水洗・注記）

期間 平成10年11月1日～平成10年11月15日

組織 調査部長 沼澤 豊、調査事務所長 高田 博

担当者 技師 城田義友

発掘調査 和田内遺跡

期間 平成11年1月6日～平成11年1月14日

担当者 技師 城田義友

平成11年度

整理作業（～原稿執筆、報告書刊行）

期間 平成11年8月1日～平成11年8月12日

組織 調査部長 沼澤 豊、調査事務所長 高田 博

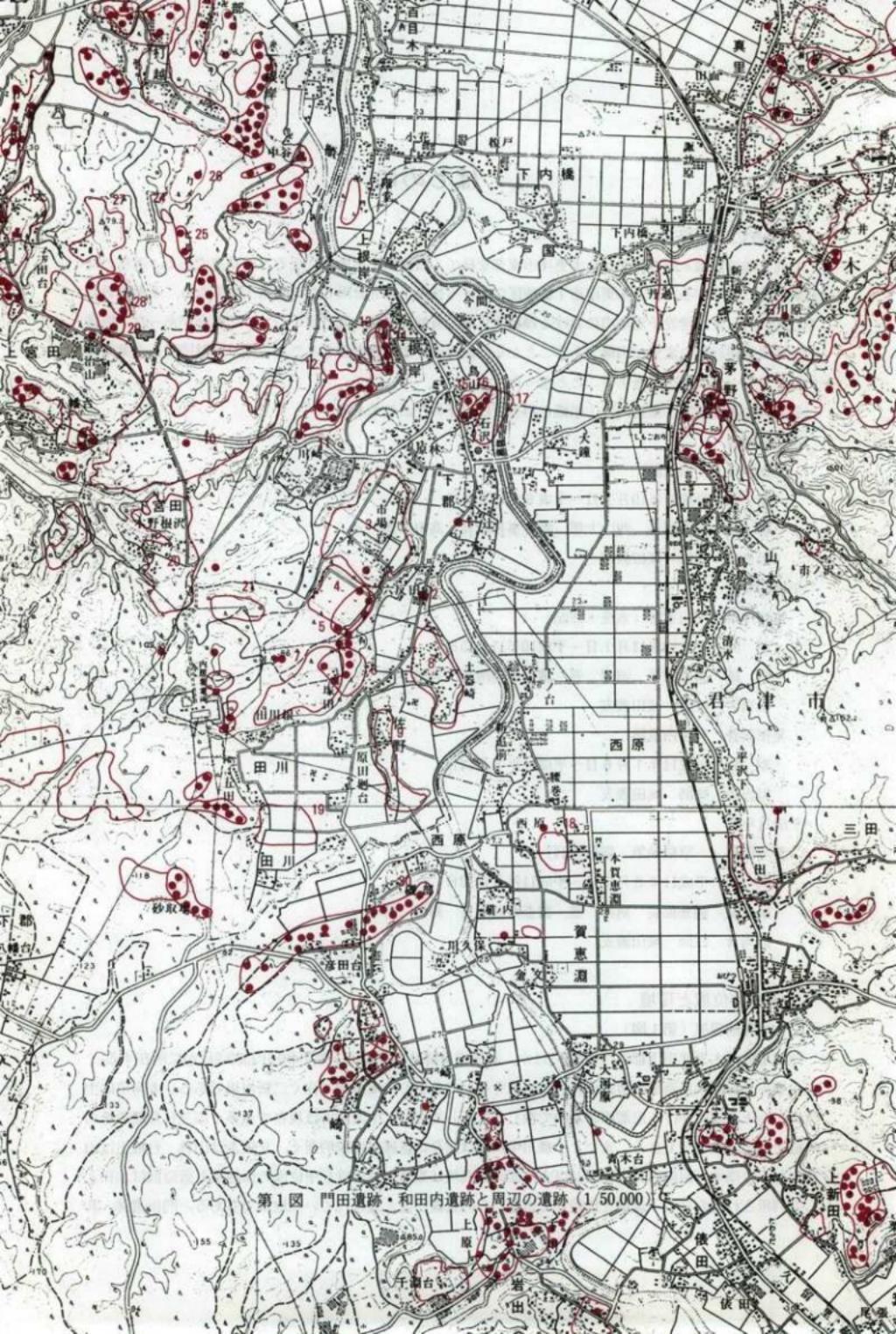
担当者 技師 城田義友

2 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境（第1図）

門田遺跡は木更津市下郡字門田590-2ほか、和田内遺跡は木更津市下郡字和田内389-2ほかに所在する。

小櫃川は房総半島南部の清瀬山付近に水源を發して北上し、東京湾に注ぐ二級河川である。本河川は中流域から下流域にかけて氾濫原のなかで激しく蛇行しており、中流域では現在でも多くの三日月湖やその痕跡を見出すことができる。また、小櫃川中流域は開発の進展が比較的遅く、丘陵上は山林、台地上は山林もしくは畠地、河岸段丘上位面及び中位面の微高地は集落、河岸段丘中位面の低地部と低位面は水田として利用されており、下流域と比較して以前からの景観がよく残されている地域である。門田遺跡・和



第1図 門田遺跡・和田内遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)



第2図 門田遺跡・和田内遺跡と周辺の地形 (1/5,000)

田内遺跡はこのような小櫃川中流域左岸の河岸段丘上位面上に立地しており、西側に広がる台地との比高差約20m、現在の河床との比高差約30mである。西側の台地は小櫃川の蛇行によって大きく円弧状に削り取られた地形が連なっており、門田遺跡はその円弧の中央から南半部、和田内遺跡は削られた台地南端の突出部付近からその南側の円弧の北半部にあたる。

(2) 歴史的環境 (第2図・第1表)

本遺跡の周囲には特に台地部を中心として多くの遺跡が確認されている。そのうち、本遺跡との関わりが考えられるものについて第2図・第1表にて示した。

	遺跡名	種別	立地	時代	文献	備考
1	門田遺跡	散布地	河岸段丘上	古墳～近世	本書	
2	和田内遺跡	散布地	河岸段丘上	古墳～近世	本書	
3	市場台遺跡	散布地	台地上	中世～近世		
4	滝台遺跡	散布地	台地上	奈良・平安		
5	滝台古墳群	古墳	台地上	古墳		円墳4基
6	部田谷古墳群	古墳	台地上	古墳		円墳6基、方墳1基
7	上ノ台遺跡	散布地	台地上	古墳		
8	土器崎遺跡	散布地	河岸段丘上	奈良・平安		
9	南台ノ前遺跡	散布地	自然堤防上	奈良・平安		
10	林遺跡	集落跡	台地上	古墳～平安	1～3	
11	根岸古墳群	古墳	台地上	古墳		円墳11基
12	上根岸館跡	城館	台地上	中世～近世		
13	重三台遺跡	散布地	台地上	奈良・平安		
14	重三台古墳群	古墳	台地上	古墳		円墳7基
15	石塚古墳群	古墳	自然堤防上	古墳		円墳2基
16	石塚塚群	塚	自然堤防上	中世～近世		円墳2基、方墳1基
17	沢間遺跡	散布地	自然堤防上	古墳		
18	大坪遺跡	散布地	自然堤防上	古墳		
19	角見遺跡	散布地	河岸段丘上	古墳		
20	木野根沢台遺跡	散布地	台地上	奈良・平安		
21	羽黒下遺跡	散布地	台地上	奈良・平安		
22	割符遺跡	散布地	丘陵上	奈良・平安		
23	大竹鞍ノ台古墳群	古墳	丘陵上	古墳		円墳11基
24	向神納里遺跡	集落・墓跡	丘陵上	古墳～平安	7	
25	向神納里古墳群	古墳	丘陵上	古墳	7	円墳2基
26	二又堀遺跡	集落・古墳	台地上	古墳～平安	5	方墳3基
27	笊田遺跡	集落跡	台地上	古墳～平安	4	
28	三ツ田台遺跡	集落跡	台地上	古墳～平安	4	
29	大竹古墳群	古墳	台地上	古墳	3・5・6	円墳15基
30	臨原古墳群	古墳	丘陵上	古墳		円墳23基、前方後円墳1基

第1表 周辺遺跡一覧

参考文献

- 井口 崇ほか 1987 『林遺跡』 (財)君津都市文化財センター
- 能城秀喜 1994 『林遺跡II』 (財)君津都市文化財センター
- 中能 隆 1999 『林遺跡III』 (財)君津都市文化財センター
- 田形孝一ほか 1991 『笊田遺跡・三ツ田台遺跡・大竹古墳群(1)』 (財)君津都市文化財センター
- 稲葉昭智 1993 『大竹遺跡群発掘調査報告書I』 (財)君津都市文化財センター
- 稲葉昭智 1994 『大竹遺跡群発掘調査報告書II』 (財)君津都市文化財センター
- 稲葉昭智 1995 『大竹遺跡群発掘調査報告書III』 (財)君津都市文化財センター

II 門田遺跡

1 調査の経過と概要（第3図・第4図、図版3）

調査対象区域は大きく北区と南区に分けられ面積は合計3,300m²、現況は北区が水田、南区は宅地である。調査は対象面積の10%にあたる330m²の上層確認調査から実施した。北区に第3トレンチ～第7トレンチの5箇所、南区に第1トレンチ、第2トレンチ北、第2トレンチ南という3箇所、合計で8箇所のトレンチを設定して遺構の有無を確認するとともに、表土以下の地形とその成立要因の把握につとめた。

表土以下の土層は、北区では上からおおまかにみて、

- I 灰色～暗灰色の粘土層（近世～現代の水田耕作土）
- II 暗灰褐色の粘土層（近世頃の鋤床、中世以前の水田耕作土）
- III 暗褐色～黒褐色粘質シルト層（中世以前の鋤床、古代以前の水田耕作土）
- IV 黄灰色およびそのグライ化した砂層（自然堆積層）

に分けられる。いずれの土層も層理の不連続面が認められたため水田跡の検出が期待されたが、各層の土壤の堆積が薄いこと、上位層段階の働きこみが激しいことなどから畦畔などは検出できなかった。

また南区では上からおおまかにみて、

- I 客土
- II 灰色～暗灰色の粘土層（近世～現代の水田耕作土）
- III 暗灰褐色の粘土層（近世～現代の鋤床、近世以前の水田耕作土）
- IV 黄灰色およびそのグライ化した砂層（自然堆積層）

に分けられる。このなかでは客土の堆積が厚く、また北区のⅢ層に対応する土層は検出されなかった。おそらく近世の比較的早い段階に大きく削平されてしまったものと考えられる。

遺構は溝状遺構が第3トレンチで1条、第6トレンチで2条、旧河道が第4トレンチと第7トレンチの2箇所で検出されたほかは確認されなかった。溝状遺構の時期は第3トレンチのものが近世以降、第6トレンチのものは中世～近世が1条、古墳時代後期～古代が1条である。遺物は特に第4トレンチと第7トレンチで古墳時代後期～平安時代の土師器を中心として比較的多く出土した。ただその他のトレンチではきわめて少なくいずれも磨耗の著しい小破片であったため、本調査は実施せず確認調査のみですべての調査を終了した。

2 遺構（第5図～第7図、図版3～4・図版5）

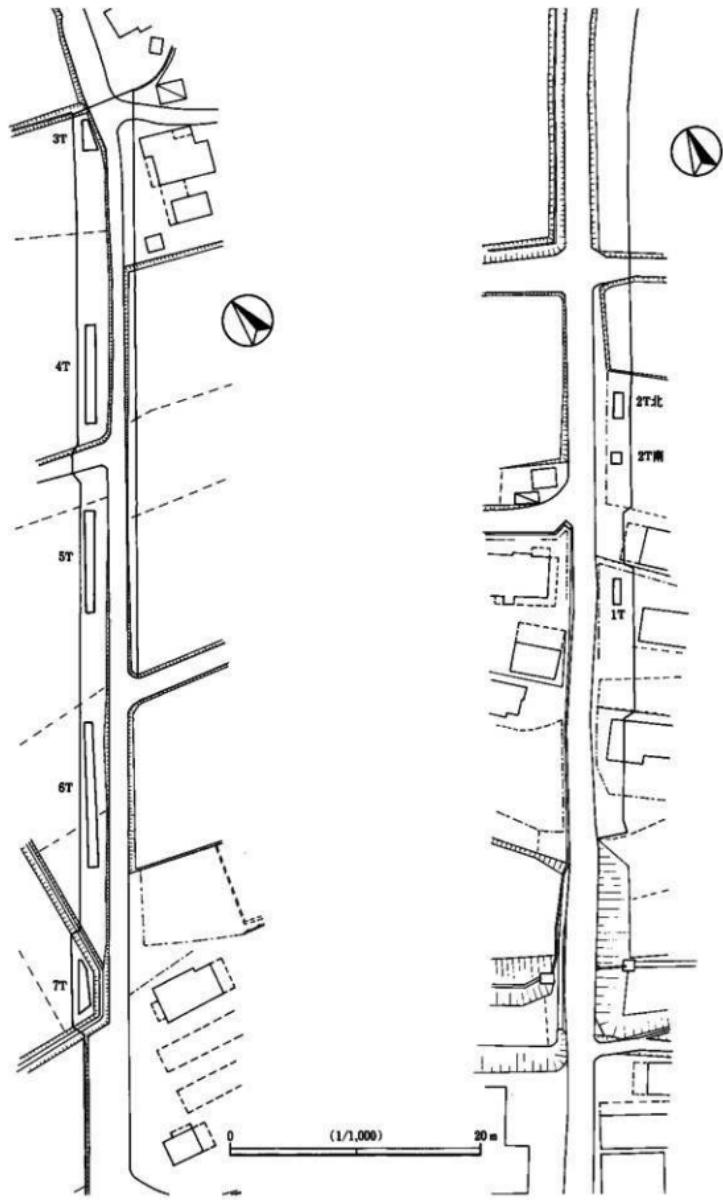
(1) 溝状遺構

SD-1（第5図）

第6トレンチ中央付近で検出された。軸方向はN-80°-Wで直線的に伸びるものと考えられる。上端幅0.8m、下端幅0.5m、深さは0.8mで断面はやや不整な逆台形を呈する。覆土は上下2層に分けられ、それぞれ上層は灰褐色粘質土、下層は暗褐色粘質土を主体とする。遺構は近世～近代の耕作土で完全にバッカされており、かつ古代以前の耕作土を掘り込んでいるため、古代末～中世段階に比定できる。

SD-2（第6図）

第6トレンチ中央付近で検出された。軸方向はN-80°-Wではば直線的に伸びるものと考えられるが、

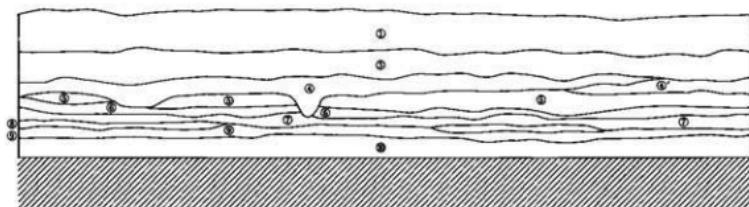


第3図 門田遺跡確認トレンチ配置図

23.000 m A

3T

A'



23.000 m B

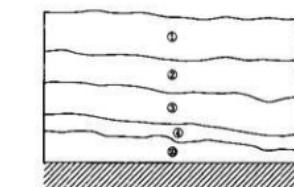
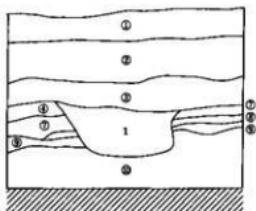
4T

B'

23.000 m C

5T

C'



- ① 黄褐色土
- ② 墓灰褐色粘質シルト（酸化鉄沈着）
- ③ 墓灰褐色粘質シルト
- ④ 墓灰褐色粘質シルト
- ⑤ 墓青褐色粘質シルト
- ⑥ 墓灰褐色粘質シルト
- ⑦ 墓褐色粘質シルト
- ⑧ 墓白褐色土
- ⑨ 黑褐色粘土（酸化鉄沈着）
- ⑩ 黄灰色砂

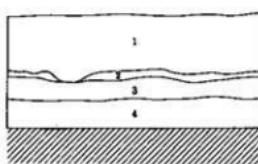
I

- ⑥ 黄白色粘土
- ⑦ 墓褐色粘質シルト
- ⑧ 墓白褐色土
- ⑨ 黑褐色粘土（酸化鉄沈着）
- ⑩ 黄灰色砂

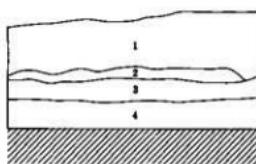
III

IV

—D— 2T北 D'



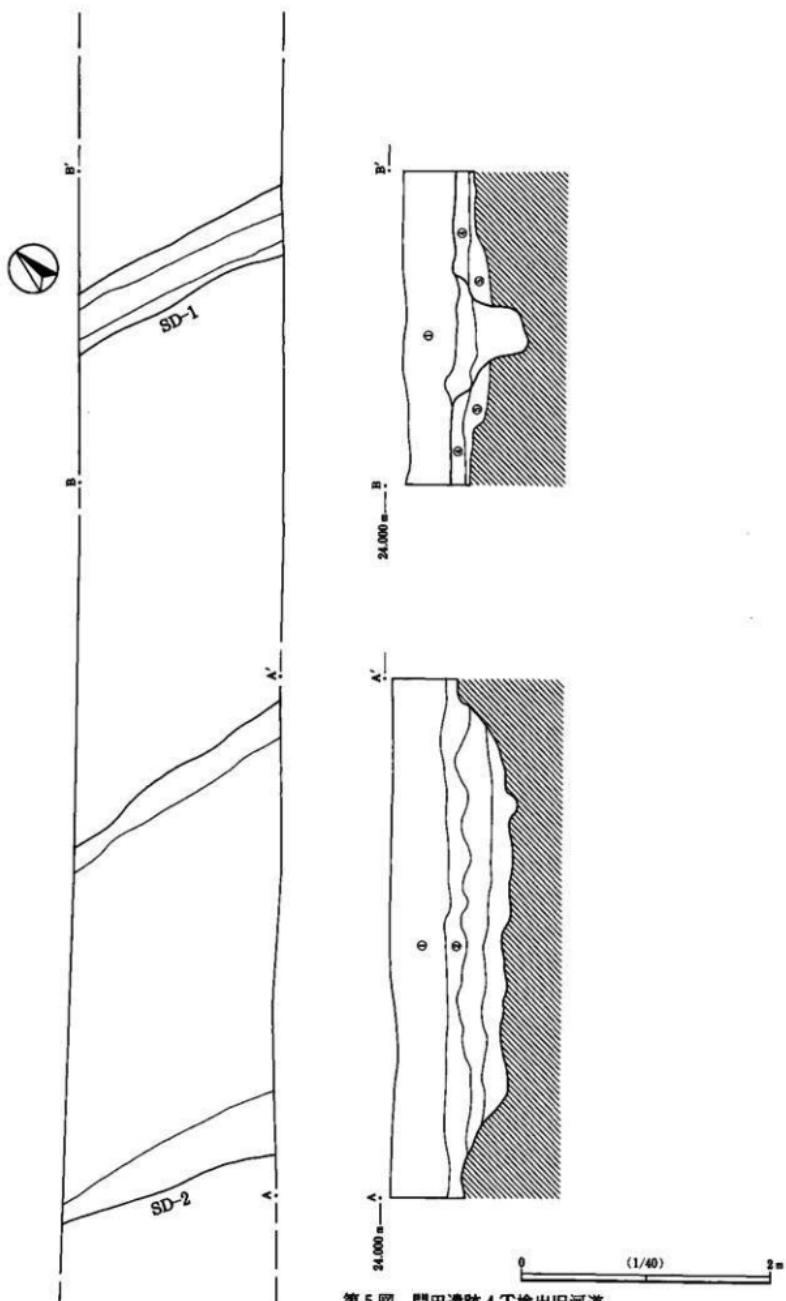
—E— 2T南 E'



- 1 寄土 (I)
- 2 黄色～墓灰褐色粘土 (II)
- 3 墓灰褐色土 (III)
- 4 黄灰色砂 (IV)

0 (1/40) 2m

第4図 門田遺跡確認トレンチ土層断面図



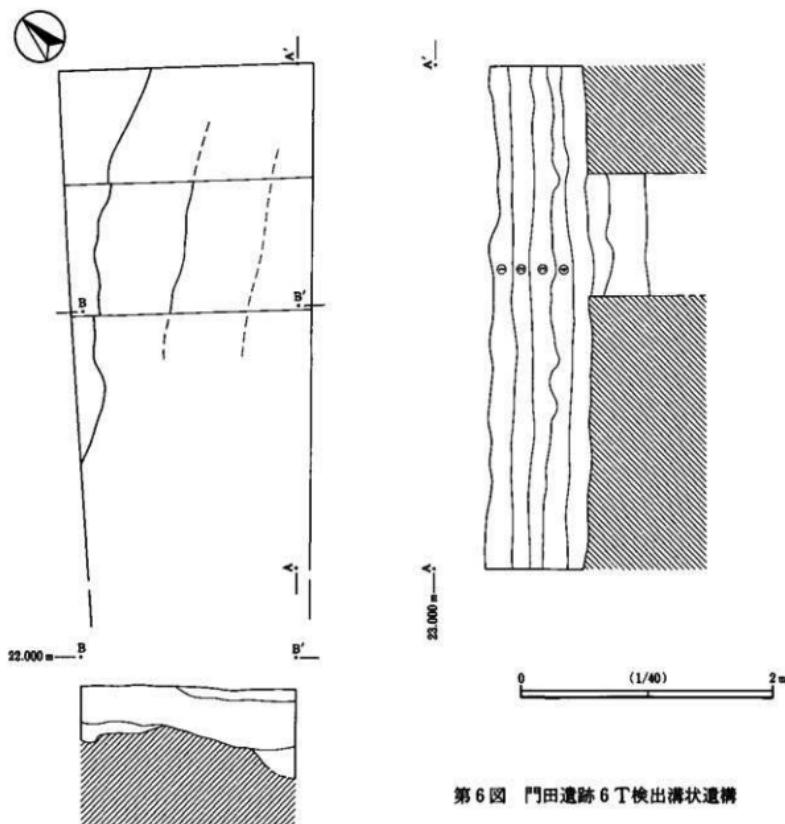
第5図 門田遺跡 4丁検出旧河道

検出部分がごく一部と考えられるためはっきりしない。上端幅4.0m、下端幅3.5mと幅広く、深さは0.5mと浅い。断面は不整な逆台形を呈する。覆土は上下2層に分けられるがいずれも暗褐色～黒褐色の粘質シルトを主体とし、下層には黄褐色砂ブロックを少量含んでいる。遺構は中世以前の耕作土で覆われていることから、古代以前に比定することができる。

(2) 旧河道

SD-3 (第5図、図版3-4)

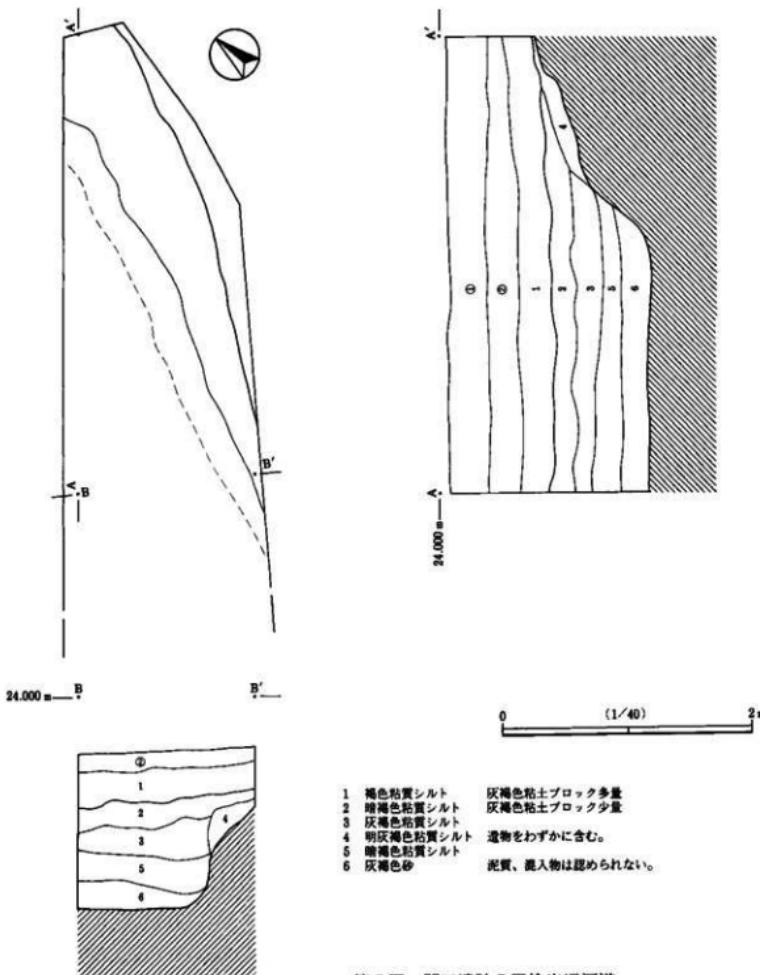
第4トレンチ北端部付近で検出された。ごく一部の検出であるため規模は不明である。調査区域の制約により川床面までは掘り下げることができなかつたが、覆土は確認できた範囲では大きく上中下の3層程度に分けられる。上層は暗褐色粘質シルト層、中層が灰褐色粘質シルト層、下層は灰白色シルト層である。時期を推定しうる遺物は出土しなかつたが、本河道は埋没後Ⅱ層によって覆われていることから、少なくとも中世以前のものであることは間違いないだろう。



第6図 門田遺跡6T検出構造遺構

SD-4 (第7図、図版3-5)

第7トレンチのはば全域にわたって検出された。軸方向や規模ははっきりしない。覆土は大きく4層に分けられる。上層は暗褐色シルト層、中層は灰褐色粘質シルト層、下層は暗褐色粘質シルト層、最下層は灰褐色砂層である。なお本河道は埋没後Ⅱ層によって覆われていること、上層～中層から古代に比定されるロクロ土器や古墳時代の土器小破片が若干量出土したことなどから、少なくとも中世以前に遡ることは間違いかろう。



第7図 門田遺跡7丁検出旧河道

3 遺物（第8図、図版4-1）

遺物はほとんどが小破片であり全容を伺えるものはごくわずかであり、図示し得たのは以下の18点である。内容は縄文土器2点のほか、平安時代～中世前半の土器類を中心として、古墳時代後期～近世までを含む。寸法の径についてはいずれも特に記載のない限り復元の値である。

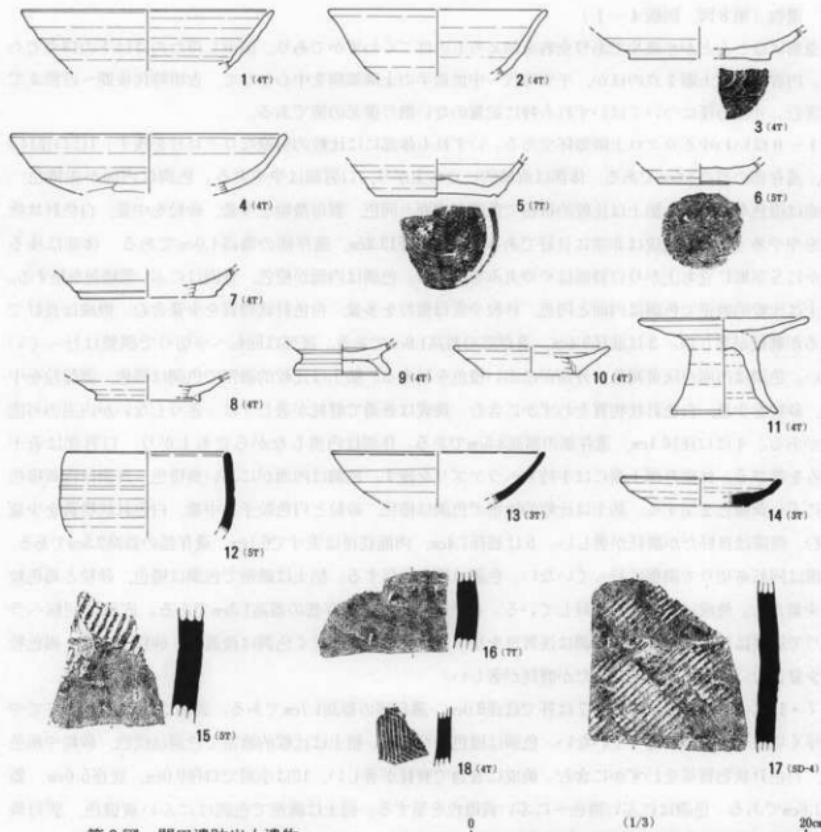
1～6はいわゆるロクロ土器器杯である。いずれも体部には比較的明瞭なロクロ目を残す。1は口径14.8cm、遺存部の器高3.6cmである。体部は直線的に立ち上がり、口唇部はやや尖る。色調は内面が赤橙色、外面は橙色を呈する。胎土は比較的緻密で色調が内面と同色、雲母微粒を多量、砂粒を中量、白色針状物質をやや多く含む。焼成は非常に良好である。2は口径13.2cm、遺存部の器高4.0cmである。体部はゆるやかにS字形に立ち上がり口唇部はやや丸みを帯びる。色調は内面が橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。胎土は比較的緻密で色調は内面と同色、砂粒や雲母微粒を多量、白色針状物質を少量含む。焼成は良好であるが磨耗が著しい。3は底径8.4cm、遺存部の器高1.9cmである。底部は回転ヘラ切りで調整は行っていない。色調は内面が灰黄褐色、外面がにぶい橙色を呈する。胎土は比較的緻密で色調は橙色、雲母粒を中量、砂粒を少量、白色針状物質をわずかに含む。焼成は普通で磨耗が著しくはっきりしないが内黒の可能性がある。4は口径16.1cm、遺存部の器高3.5cmである。体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は若干丸みを帯びる。体部外面下端には手持ちヘラケズリを施す。色調は内面がにぶい黄橙色、外面は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈する。胎土は比較的緻密で色調は橙色、砂粒と白色粒子を中量、白色針状物質を少量含む。焼成は良好だが磨耗が著しい。5は底径7.4cm、内面底径は実寸で6.1cm、遺存部の器高2.3cmである。底部は回転糸切りで調整は行っていない。色調は橙色を呈する。胎土は緻密で色調は橙色、砂粒と褐色粒を少量含む。焼成は良好だが磨耗している。6は底径5.0cm、遺存部の器高1.3cmである。底部は回転ヘラ切りで調整は行っていない。色調は淡黄色を呈する。胎土はやや粗く色調は淡黄色、砂粒を多量、褐色粒を少量含む。焼成は比較的良好だが磨耗が著しい。

7・10は土器質土器である。7は杯で底径8.0cm、遺存部の器高1.7cmである。底部は回転ヘラ切りでやや厚く切残し、調整は行っていない。色調は橙色を呈する。胎土は比較的緻密で色調は橙色、砂粒や褐色粒、白色針状物質等をわずかに含む。焼成は普通で磨耗が著しい。10は小皿で口径9.0cm、底径5.6cm、器高1.6cmである。色調はにぶい橙色～にぶい黄橙色を呈する。胎土は緻密で色調はにぶい黄橙色、雲母微粒を多量、砂粒を中量、赤褐色粒を少量、白色針状物質をわずかに含む。焼成は普通で磨耗が著しい。

8・9は高台付のロクロ土器器杯で、高台は貼付けロクロナデ整形である。8は高台径6.3cm、杯部底径5.2cm、高台高0.4cm、遺存部の器高1.5cmである。高台は三角形で外向する。色調は内面が淡橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。胎土は比較的緻密で色調は外面と同色、砂粒や赤褐色粒を少量含む。焼成は普通で磨耗が著しい。9は内黒である。実寸で高台径5.6cm、杯部底径4.8cm、高台高1.0cm、遺存部の器高1.9cmである。高台は八字形で下端が肥厚する。色調は内面が黒色、外面は灰白色～淡黄色を呈する。胎土はやや粗く色調は黄灰色、砂粒と雲母微粒子を多量、白色針状物質を少量、赤褐色粒をわずかに含む。焼成は普通で内面はかなり磨耗している。

11は足高台の皿である。口径9.7cm、高台径6.2cm、杯部底径4.0cm、高台高4.2cm、器高5.6cmである。高台に皿を貼付けロクロナデ整形を施す。色調は内面が橙色～浅黄橙色、外面は浅黄橙色を呈する。胎土は比較的緻密で砂粒や雲母微粒を多量、赤褐色粒を中量含む。焼成は良好だが磨耗している。

12～14は陶磁器である。12は灰釉陶器碗である。口径9.5cm、最大径10.3cm、遺存部の器高4.8cmである。



第8図 門田遺跡出土遺物

0 (1/3) 20cm

外面には細かいロクロ目を残す。全面に灰白色～オリーブ黄色の透明ガラス質釉を施すが、外面下半は黒褐色を呈する。胎土は緻密で灰白色、砂粒を少量含む。焼成は非常に良好である。13は磁器碗である。口径12.6cm、遺存部の器高3.1cmである。外面にやや粗いロクロ目を残す。全面に灰オリーブ色の半透明ガラス質釉を施す。胎土は極めて緻密で灰白色、黒色微粒子を中量、白色粒子をわずかに含む。焼成は非常に良好である。14は灰釉陶器皿である。口径9.4cm、底径5.7cm、高台高0.1cm、器高1.7cmである。外面にやや強いロクロ目を残し、高台は削出しのベタ高台である。全面に灰白色の半透明ガラス質釉を施す。胎土は粗く灰白色、混入物は認められない。焼成は非常に良好である。

15～17は常滑系甕である。色調は灰色を呈し、内面はヘラケズリを施す。外面は15・17が平行タタキ、16はタタキ後ヘラナデを施す。胎土は比較的緻密で色調は灰色、砂粒を多量に含む。焼成は良好である。

18は須恵器甕である。内面はヘラナデ、外面には斜格子タタキを施す。外面は黒色、内面は灰色を呈する。胎土は緻密で色調は内面と同色、砂粒や黑色粒子を少量含む。焼成は非常に良好である。

III 和田内遺跡

1 調査の経過と概要（第9図、図版4-2・3）

調査対象面積は420m²で、現況は宅地もしくは畠地であるが、戦前までは水田であったという。調査は対象面積の10%にあたる42m²の上層確認調査から実施した。

第1トレンチ～第7トレンチまで合計7箇所のトレンチを設定して遺構の有無を確認するとともに、表土以下の地形とその成立要因の把握につとめた。

表土以下の土層は、上から大まかにみて、

- I 客土
- II 灰褐色粘質シルト
- III 暗灰褐色粘質シルト
- IV 黄褐色砂

に分けられる。II層とIII層の下部には若干の不連続面が認められたが、はっきりしたものではなく堆積も薄いため近代以前の水田跡は検出できなかった。また全体的に近代以降の区画整理のため著しく削平されており、その他の遺構も第1トレンチでピット群が検出された以外には全く確認されなかつた。

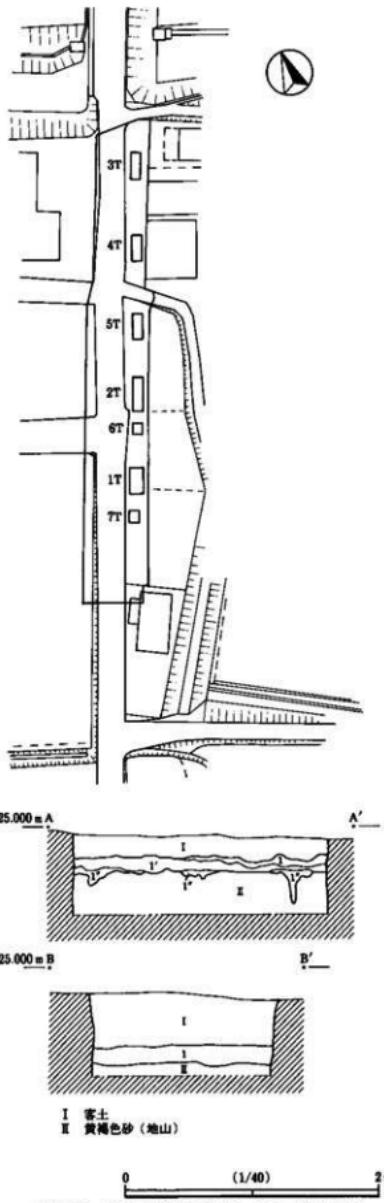
遺物は第7トレンチで縄文土器1点のほか、第1トレンチ・第4トレンチで古墳時代後期～奈良・平安時代の土師器小破片が若干量出土したのみであり、図示できる遺物はない。

遺構・遺物ともにわずかであったため、確認調査すべての調査を終了した。

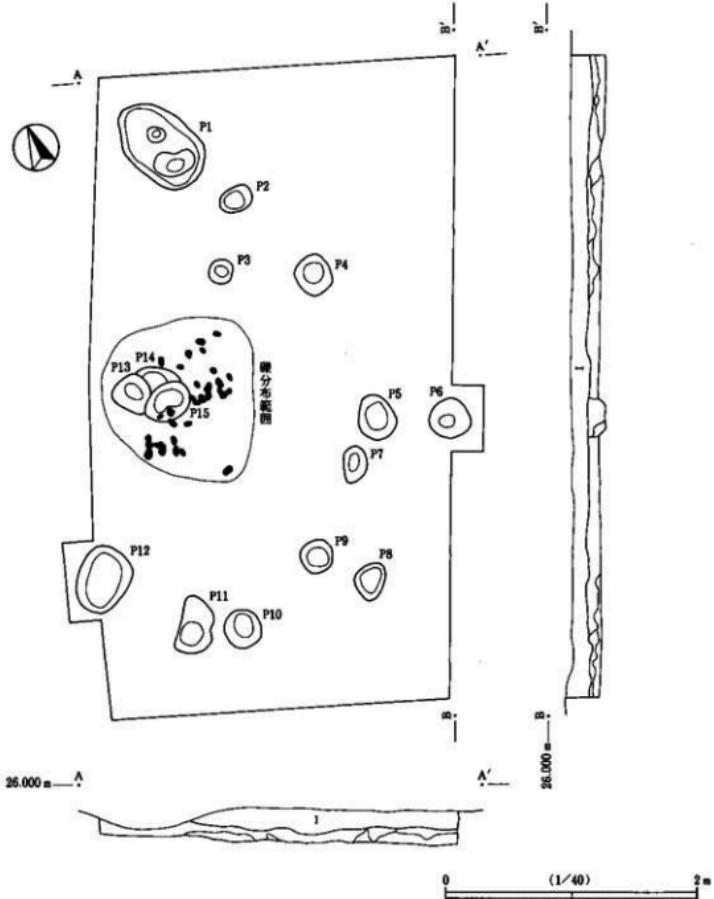
2 遺構

(1) ピット群（第10図、図版4-2）

調査区南部の第1トレンチで検出された。P1～P15の合計15基のピットが確認されたが、現道下に広がる様相がうかがえることから、全体のピット数は不明であるが、検出状況から半分程度は検



第9図 和田内遺跡確認トレンチ配置図



第10図 和田内遺跡 1T検出ピット群

出されているものと考えられる。ピットは12基（1～12）が環状にめぐり、中央付近に3基（13～15）存在する。平面形は不整円形ないし橢円形、断面形はいずれも逆台形を呈する。規模は最大がP-1で長軸0.8m、最小はP-3で直径0.2mである。深さは確認面から0.3m前後で比較的そろっているが、中央付近のピットのみ0.2mとやや浅い。覆土はいずれも暗褐色土で焼土粒や炭化粒を少量含んでいる。いずれのピットからも遺物は出土しなかったが、中央付近のピットおよびその周囲には円礫が多く出土した。覆土の状況から中世以前のものと推定される。



門田遺跡・和田内遺跡周辺航空写真（昭和42年）



1. 門田遺跡遠景（南区）
(十二所神社参道より)



2. 門田遺跡遠景（北区）
(段丘上位面より)



3. 門田遺跡 北区
調査前風景

門田遺跡



1. 第3トレンチ完掘



2. 第4トレンチ検出旧河道（SD-3）



3. 第4トレンチ北部セクション（SD-3）



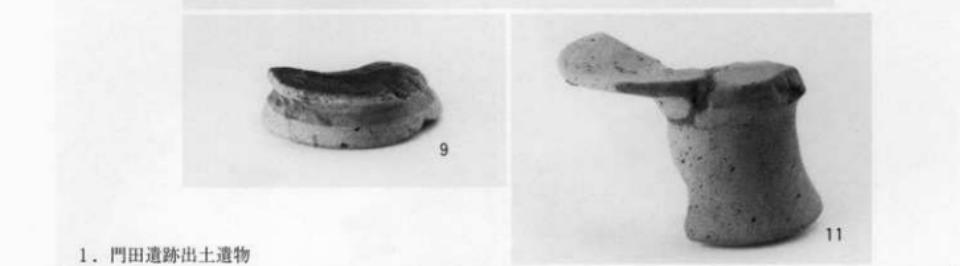
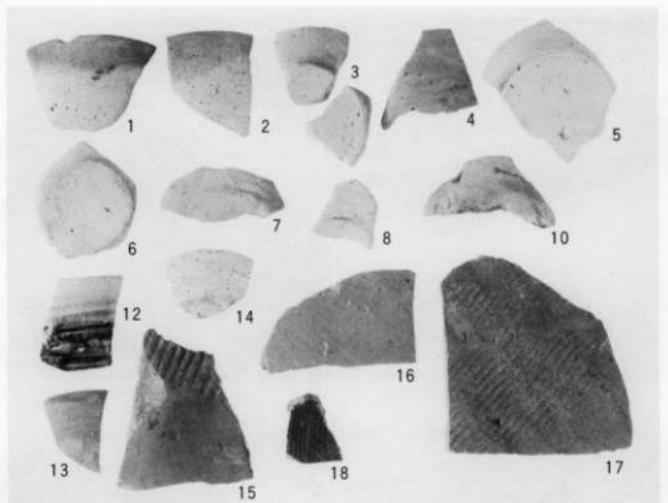
4. 第4トレンチ南部完掘



5. 第5トレンチ完掘



6. 第7トレンチ検出旧河道（SD-4）



1. 門田遺跡出土遺物

和田内遺跡



2. 第1トレンチ検出ピット群



3. 第2トレンチ完掘

報告書抄録

ふりがな 書名	いっぽんけんどうながうらかづせん（きさらづしもごおり）まいぞうぶんかざいちょうさはうこくしょ 一般県道長浦上総線（木更津市下郡）埋蔵文化財調査報告書							
副書名	木更津市門田遺跡・和田内遺跡							
卷次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第378集							
編著者名	城田義友							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
門田	木更津市下郡 字門田590-2他	206	015	35度 20分 40秒	140度 02分 38秒	19981001～ 19981031	3,300	道路建設に 伴う事前調 査
和田内	木更津市下郡 字和田内	206	017	35度 20分 33秒	140度 02分 36秒	19991016～ 19991118	420	道路建設に 伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記	事項	
門田	散布地	縄文 古墳 奈良・平安 中近世	なし 溝跡 溝跡 溝跡	1条 1条 1条	縄文土器 土師器、須恵器 上師器、須恵器 国産陶器、青磁、鉄滓、 かわらけ			
和田内	散布地	縄文 古墳 中近世	なし なし ピット		縄文土器 土師器 なし			

千葉県文化財センター調査報告第378集

一般県道長浦上総線（木更津市下郡）埋蔵文化財調査報告書

－木更津市門田遺跡・和田内遺跡－

平成12年3月31日発行

編集 財団法人 千葉県文化財センター

発行 千葉県土木部

千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印刷 大和美術印刷株式会社

木更津市潮浜2-1-10